

一般社団法人日本社会福祉学会
第70回秋季大会報告

第70回秋季大会 実行委員長 津田 耕一(関西福祉科学大学)

2022年10月15日(土)、16日(日)の両日、関西福祉科学大学にて、第70回秋季大会が開催されました。ここ数年、台風、新型コロナウイルス感染に伴い、一部プログラムの中止やオンライン形式による開催の時期を経て4年ぶりに全面対面形式による開催ができたことを心より感謝申し上げます。当日は天候にも恵まれ、多くの方々にご参加いただきましたことを感謝申し上げます。参加登録者数(海外自由発表者を含む)585名、会場への参加者348名、オンラインでの参加者287名の方にご参加いただきました。

一方、この間の社会情勢等を鑑み、対面形式、オンライン形式、オンデマンド配信などを融合した、これまで日本社会福祉学会では経験したことのない開催形式を取り入れての開催となりました。途中マイクの音声が聞こえにくいなどいくつかご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

学会の開催のお話を頂いてから3年越しの開催となりました。当時会長の金子光一先生より連絡を頂いた時には戸惑いもありましたが、社会福祉学科の若手・中堅の教員から「やるなら今ですよ。私たちが元気なうちにぜひ!」という声に後押しされてお引き受けいたしました。新型コロナウイルス感染対策の関係上、開催が1年延長し、今年度の開催となりました。

この間、大会実行委員会委員長の山縣文治先生、岩崎晋也先生、伊藤嘉余子先生はじめ実行委員、学会の理事、国際文献社の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

初日の午前は、「社会福祉研究・教育における多文化共生～コロナ禍における留学生の経験と教育・支援の現場から～」と題して留学生と国際比較のためのワークショップが行われました。開会式の後、学会賞授賞式が挙行されました。岩田正美名誉会員と永田祐会員に学術賞が、史邁会員と阿久津美紀会員に奨励賞(単著部門)が贈られました。おめでとうございます。

本大会のテーマは、「新たな日常と社会福祉—「つながり」の未来を見据えて—」です。幾多の災害や新型コロナウイルス感染拡大を機に、私たちの日常の生活様式が変化し、新たな生活様式の模索が迫られており、改めて生活の日常性ということについて、問い直す時期が到来したとも言えます。そのようななか、人々の生活に大きく関与している社会福祉の果たす役割は重要視され、社会福祉に従事する専門職は不可欠な存在であり、人々の「つながり」をテーマに専門職の果たすべき役割について議論するというのが趣旨です。

大会校企画のシンポジウムでは大会テーマに沿って活発な議論が展開されました。対面ならではの熱気にあふれシンポジストと会場が一体となったシンポジウムとなりました。

2日目は、研究支援委員会による「研究を止(と)めない～様々な危機をどう乗り越えるか～」と題したスタートアップ・シンポジウム、「障害×女性—性と生殖をめぐる～」と題した特定課題セッション、「社会福祉学における研究方法論を考える～評価の具体的な方法～」と題した学会企画セッション、口頭発表が行われました。ポスター発表はweb上で行われました。口頭発表は105報告でした。全体統括、司会の大役を担っていただいた会員の皆様に、改めてお礼申し上げます。

本大会を振り返って、いくつかの課題も見出されました。まず、口頭発表・ポスター発表の査読につ

いてです。かなり厳格にしたことで発表者の皆様には相当なご負担をおかけしました。査読の範囲や基準についての議論が求められています。第2に、従来の対面形式のみの開催から、ライブ配信、オンデマンドといった複雑な開催としました。メリット、デメリットの両側面があらうかと思えます。次年度以降の開催形式について議論していく必要があります。第3に、新型コロナウイルス感染防止の観点から、情報交換会を取り止めました。ポスター発表もweb形式としました。このことで、会員同士の交流の場や歓談の機会が制限されていたと推察されます。久しぶりの対面形式ではあったもののやや残念であったと思われまます。参加された皆様の忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いに存じます。

最後に、本大会は学会員による学内の実行委員17名と学会員ではない社会福祉学科教員1名による18名の体制で準備に臨みました。また、事前の準備や当日のスタッフとして本学の学生が来場者を心を込めてお迎えいたしました。空閑浩人会長の大会開会の挨拶の冒頭で本学学生の対応に対するお褒めの言葉を頂戴しました。教員スタッフ、学生スタッフ、“みんなで作り上げた”大会だと思っております。学内の関係者にも感謝申し上げます。